
殺人者のブログ ~ Murder's log ~

頼白井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人者のブログ 〈 Murder's log 〉

【Nコード】

N 6 6 1 7 A

【作者名】

頬白井

【あらすじ】

多数の殺人犯が、殺人の様子を書いたブログ。誰が作ったのか？なぜ殺人犯はブログを書けるのか？謎だらけのブログを、新聞部の高校生二人が調査する！

（前書き）

この物語はフィクションであり、人物、地名、事件、Webサイト等は総て架空の物です。

六月六日

彼女を殺した。

アイツが悪いんだ。 別れようなんて、言うから。

首を絞めた。

細かった。

すぐに、動かなくなった。

醜い顔、天罰だ。

放課後、新聞部の部室には二人、生徒がいた。部活動としては少ないが、これで出席率100%である。

「ねえリユート、『マードーズ・ログ』って知ってる？」

髪を短めにした、活発そうな女子高生が、パソコンを操作している男子高生、桜井龍人さくらい りゅうとに話かけた。

「名前だけ聞いたことがある」

シャープな印象の顔をパソコンのディスプレイに向けたまま、龍人は簡潔に答えた。

「じゃあ、内容は知らないんだ？」

ようやく龍人は女子高生に顔を向ける。

「いまツクシに聞くまで、名前すら聞いたことが無かったからね」
女子高生、春日ツクシ（かすが つくし）は、軽く龍人を睨みつける。しかし、龍人はまったく気にしない様子で、ディスプレイに再び向き直る。

「で、その『マードーズ・ログ』ってサイトのURLは？ ああ、HTTPはいらないから」

龍人はインターネット・ブラウザを開き、アドレス入力の準備をする。

「……コロン、スラッシュスラッシュ、エム……」

コロンとスラッシュ二つを言ったのは、ツクシのささやかなイヤガラセだろう。

ツクシがURLを言い終わるのとほぼ同時に、ディスプレイには“マードーズ・ログ”という日記風ウェブサイト、いわゆるブログが表示されていた。

背景は黒で、文字は赤。

いかにもな雰囲気が漂うデザインだ。このデザインのために読みやすさを度外視したのだろう。

妙にロード時間の長い画像があると思ったら、十字架の中心に目玉という悪趣味な物で、さらに目玉がキョロキョロ動くというアニメーションGIFだった。さらに、その画像は、画面をスクロールしてもついてきて、常に画面左に表示されている。

「ねえリユート、ひとつ訊いていい？」 ツクシは龍人の肩越しにディスプレイを見ながら尋ねた。

「『ログ』なんて言葉は、一般的にネットくらいでしか聞かないからね。数学のlogなんて、覚えてる人は少ないよ」

またもツクシは龍人を睨みつけることになった。質問する前に答えられたのだから、仕方ない。

「『六月六日』日付は昨日か『彼女を殺した。アイツが悪いんだ。別れようなんて、言うから。首を絞めた。細かった。すぐに、動かなくなった。醜い顔、天罰だ』なんだ？ この文章力の欠片もない文章は」

龍人はブログの内容を読みあげ、そして文章に文句を言った。

「さあ？ こーゆー文章が、詩的で良いつて思ったんじゃない？ でも、この記事は昨日見たときには無かったよ」

新聞部に所属している二人にとって、稚拙な文章にしか見えないのは仕方がない。とはいえ、内容は新聞部員として惹かれる物であることも事実だ。

「まあ、記事にするかどうかは別として、調べてみる価値はあるな」「記事にしないの？」

ツクシは不満そうだ。

「俺としては記事にしてみたいけど、校内新聞には掲載できない可能性が高い。このブログが真実であれデタラメであれ、コレを見て殺人衝動を覚えるヤツだって出てくるかもしれない。そんなサイトを紹介するようなマネはできないな」

テレビゲームやマンガの影響で殺人を犯す……とされる世界に、そのものズバリ、殺人体験日記など紹介するほど愚かではない、ということだ。

「じゃあ、記事はどうするの？」

「校長のカツラが何種類あるか、細部までまとめた記事があるから、それを使う」

イザというときに使えるよう、代替記事を用意してある。

「なに……このギャップ……」

「キヤップは帽子。カツラはウィッグだ」

「ギャップって言ったんだけど？」

「うん。知ってる」

そんな冗談を交えつつ、役割を分担して調査を開始した。

ツクシは、前日にブログを一通り読んでいたので、実際にその事件が起きていたのかをチェックし、表にまとめている。

龍人はブログを一通り読むことから始めた。

「一番最初は今年のバレンタインか」

「最初から読むでるの？」

「ああ、ブログの構造上読みにくいけど、この方がいい」

ブログは日記の最新のページにシオリが挟まっているようなもので、普通に読み返そうとすると、最新から近い順。日付を逆行しなければならぬ。

「『二月十四日。バレンタインに彼殺す。私以外の女から、チョコをもらって喜ぶ笑顔。私が好きなその笑顔。私以外になぜ向ける？だから殺した、愛する彼を。愛していいのは私だけ』って、これ

書いたの女だな」

「あ、気付いた？」

「気付かないヤツがいたら、ここに連れてきてくれ。まあ、男が書いたという可能性も、僅かではあるが、無くはない」

「それでも、昨日書いた人とは別の人が書いてると思うなあ」

「そうだな。昨日のメタクソな文とは打って変わって、意識しなくてもリズムカルに読める文……というか詩に近いかな。または講談」

七五調で書かれているので、講談風ではあるが、まったく別物。

なので、龍人は文の構造が似ていると言いたいのだ。

「そーね。内容はともかく、読みやすいね」

「ツクシ、この事件……」

「はいはい、調べてありますよ」

「気が利くね」

「一番最初の事件だから、重要でしょ？」

「で、どう？」

早く報告しろ、と言わんばかりの態度に不満げなツクシだが、特にモンクを言うでもなく報告を始める。

「その日に起きた事件で、状況と犯人の証言から多分、^みだけど、三^{えのあや}重野綾の事件かな」

「どんな事件？」

「えーっと、三重野綾が、当時付き合ってた会社員の酒井俊哉^{さかい としや}さんを殺害したって。犯人は、彼が他の女性と仲良くしているのを見て、殺意がわいたって言ってるみたい」

確かに、最初の記事と合致している。

「犯人の逮捕と、供述の報道はいつになってる？」

このブログに書かれている動機は、逮捕される前に於いては“犯人しか知り得ない事実”となる。逮捕前、または報道前に、この文章が書かれていれば、犯人が書いたものと言えるだろう。

「逮捕は16日の朝、その日の夕刊には掲載されてるよ」

「なるほど、一応整合性はあるね。ただ、この記事にトラバやコメ

ントがないから、事件後に誰かが日付を偽って書いた物……って可能性もあるね」

トラバ、トラック・バックのことで、他のブログがこの記事を紹介したか、という物だ。

たとえば、トラック・バックをしたブログの記事が逮捕前の物であれば、この記事の信憑性が高まる、ということだ。コメントも同様だが、管理者が日付を変更してしまえば、あまり意味がない。もちろん、変更できない部分だが、トラック・バック先と違って同じサーバのデータなので、改竄は比較的容易だ。

「でも、一つだけ、いつ書かれたか分かってて、それでまだ発覚してない事件があるよ」

ツクシはもったいぶっているが、結局龍人もその記事は何か分かっている。まあ、ツクシも“リユートは分かっている”と思っているように。

「昨日の記事のことだろ」

との答えにも、悔しそうではない。

「うん。私が昨日見たのは八時くらい。全部読むのに一時間くらいかかったけど、その後ページ更新してもこの記事はなかったね」

「つまり、九時過ぎから……まあいいか、分かっているな。『昨日の記事の事件』がニュースで流れたか流れてるか流れるかのチェックよろしく」

「リユートがやってよ」

「役割分担しただろ。ツクシの仕事は『ブログの事件が起きたかどうかのチェック』だろ？」

ツクシは、黙ってテレビの電源をいれた。ボリウムをいっぱい上げたのは、龍人に対するイヤガラセだろう。しかし、あまり効果はないようだ。

『東京都石田市の石田中央公園で、女性の遺体が発見され……』

テレビから流れてきた女性アナウンサの声を聞いたツクシは、龍

人に

「この事件……」

と、言いかけるも

「聞いているから、静かに」

龍人にたしなめられる。しかし、龍人も、この事件が昨日の記事の事件であると確信しているからこそ、ニュースを聞こうとしているのだ。

『亡くなられたのは、石田市に住む高校生、綾瀬美樹さん十六歳。死因は頸部圧迫による窒息と見られ、死亡推定時刻は昨夜十時頃。警察では、綾瀬さんの携帯電話に残された発信履歴から、交際していた少年が、事件になんらかの関与をしている物とみて捜査を続けております』

龍人は目当てのニュースが終わると、もうテレビに興味は無いと言わんばかりに、ディスプレイに目を落とす。

「この事件だね。きっと」

龍人の目はディスプレイに向いていても、口はツクシに向いているようだ。

「そーみたいだね。ブログの更新時間と、死因、あと、付き合ってた子が犯人だとかね」

「少年は逮捕されてないから、犯人とは断言出来ないけど……ほぼ間違いないな。だから、このブログの内容は、ほぼ間違はなく各犯人が記述したものと考えていいだろう」

それでも“ほぼ”をつけるのは、ほんのわずかでも他の可能性があるからだ。

「書いたの犯人じゃなかったら……あ！もしかして、ブログに書く、その通りの事件が起きるとか！」

「ああ、そんなマンガがあつたな。つてーと、管理人は死神だな」

「リポートかもよ」

「俺は最後が『ト』だ。『ク』じゃない」

「言いたいこと、よく解ったね……」

「……なんとなく、な」

いままでに記述された事件、計二十七件を調べた結果、その総てが實在の物と言って差し支えない、と、彼らは判断した。

「それにしても、このブログは滅入る」

「リユートも滅入ったりするんだ？」

常に冷静な龍人を見ているツクシにとって、泣き言を呟く龍人は新発見なのだろう。

「文もさることながら、スクロールしてもついてくるこの目玉が嫌だ。なんか気になるし、監視されてる感じがする」

雰囲気を出すという意味では成功だが、やりすぎ感是否めない。

「ウィンドウ小さくして隠そうとしたけど、これだけは隠れないのね」

「プログラム・ミスだろ。スタイルシートで表示位置指定したら、こうなったただけだろうけど」

「イヤなプログラム・ミスだね」「ま、それはいい。……で、事件は全部犯人が違うけど、共通点があるよな」

二人とも共通点に気付いているとの再確認をする。

「はい！どれもこれも恋人を殺してます！」

「……身も蓋もない……けど、そうだね。犯人の性別、犯行時間、殺害方法は違っても、被害者は恋人で、さらに『別れ』や『浮気』

……少し広く言うと、関係の悪化が絡んできるといふ点が共通している。さらに、殺害後にブログを書いたということも共通点だな」

「ブログに書いてあるんだから、そーに決まってるじゃん」

ツクシは“そんなの当たり前”と言わんばかりの口調だ。

「ブログを中心に考えれば、ツクシの言うとおり。でも、個々の事件として考えると、二十七人もの犯人達が、一つのブログに記事を書いているという事は、異常としか言えない。となれば、『ブログを書く前に逮捕された人』だって、いるかも知れない」

「……言われてみれば、そーね。それに、普通、記事を書くにはパ

スワードがないと書けないから、そこも異常よね」

「ああ、どこにも見当たらないのに、二十七人が書けてるんだよね……」

数人が集まって、一つのブログを管理しているということも一般的ではあるが、それとは明らかに違う。

「殺人を犯した人には、パスワードが見えるとかっ！」

「……なんだ？ いま『ひかりごけ』って言葉が思い浮かんだぞ？」

「『ひかりごけ』ってなに？」

「自分で調べる。一応言っておくが、未来の世界のネコ型ロボットのポケットから出てくる道具は『日光ゴケ』だ。って、『の』が連続したな。ともかく、その意見は無視できないな」

「……へ？ ドラちゃん？」

一気に巻くしたてられ、ツクシは混乱しているようだ。

「……違う。『殺人者』には、パスが見えるんだよ、きつと」

「どゆこと？」

「あくまで可能性だ。だから、調べてみるんだよ、これから、ね」

「……えーっと、まさか……殺したりしないよね？」

ツクシは、龍人の発言に、不適な物を感じたようだ。

「まったく、こんなところに隠してるとは」

「だから、ずっと左にあったのね」

二人が使っているソフトはインターネット・ブラウザではない。新聞に掲載する写真を加工するために使っている、フォトレタッチソフトである。

フォトレタッチソフトのウィンドウには例の目玉が動く画像が、アニメーションパターンの計四種類表示されていた。ただ、背景の黒地部分に、文章が書かれている。

「黒バックに溶けこむ、微妙に違う黒で書いておくとは……」

普通ならば目立たないどころではなく、ただの背景にしか映らな

い。だが、少しでも色が違えば、フォトレタッチソフトで浮かび上がらせることは簡単だ。

『お前の恋人を殺せ』

『殺人の記録をつける』

『パスワードは“goldam”』そして、最後の一枚には、マ

ーダース・ログとは違う、あるURLが書かれていた。

『リキュート、こんなので、人を殺すのかな？』

『サブリミナルは知ってるだろ？』

『うん』

サブリミナル、潜在意識に指示を与え、相手を操ることだ。映画に於いて、僅か三十分の一秒という短い一瞬に、炭酸飲料を飲んでいる写真を挿入したことで、その映画を観た人が、その炭酸飲料を飲みたくなったというエピソードがある。『普通は、殺人という種の保存に反した行為』に対しては、潜在意識レベルになるほどブレキがかかる。でも、気持ちが揺らいだとき、『殺人』側に転ぶ後押しになる場合がある』

『ホント？』

龍人の説明に、ツクシは疑わしそうだ。

『仮説だけどね。でも、明らかにサブリミナルを狙った隠し文字があつて、それを常に表示させとして……そして、実際に恋人を殺した人間が二十七人もいる』

『でも、記事を書いた犯人が、このブログを見てたかどうかは……』ツクシは疑問を言いかけて、何かに気付いたかのように、口をつぐんだ。

『『マーダース・ログに記事を書くという発想を持つ犯人が、マーダース・ログを読んだことがあるかどうか解らない』なんて、変なこと言いそうになつただろ？』

『だから……やっぱり……』

『ああ、別れ話なり浮気なりで、『恋人を許せない』という心理状態になつたとき。サブリミナルで散々見てきた『恋人を殺せ』とい

う指示を実行してしまった……」

それでも、殺人という一線を越える人は稀である。しかし、悲しいことに、二十七人も人間が、越えてしまっている。

「誰がこんなことを……」

「それは、このサイトに書かれてるんじゃないかな？」

龍人はインターネット・ブラウザを立ち上げ、画像に隠されていたURLを打ち込む。

ちょっとした読み込み時間の後、マードーズ・ログとは打って変わって、なんの演出もない、白バックに黒文字の味気ないページが表示された。

龍人とツクシは、そのページに書かれた文章を黙読する。

『このページを見てるアナタは殺人者のはずだ。あんな仕掛けで殺人を犯すとは思えないけど、これを見てくれてるなら、無い話でもない。アナタは男か、女か、解らないが、恋人を殺した。ボクの仕掛けに後押しされたかも知れないけど、これはアナタの罪だ。殺人教唆？ それでもボクは裁かれない。なぜなら、このページを作った後は、死ぬだけだからだ』

「被疑者死亡のまま送検してえ……」

もちろん、龍人は警察官ではないので、送検はできない。

『そうだ、忘れていた。名乗っていなかったね。ボクは酒井俊哉』
そこに書かれていた名前に、二人は驚愕する。

「酒井俊哉って……」

「ああ、コイツがマードーズ・ログを遺したってことか」

『ボクを殺害した事件が報道されるかは、ボクが生きている間には解りようがない。しかしキミは知ってるはずだ。マードーズ・ログの最初のブログ。その被害者になる予定だよ』

酒井俊哉、バレンタインの事件の、被害者。

『最初のブログだけはボクが書いた。すでに、彼女に暗示をかけてある。そしてブログどおりにボクを殺してもらうつもりだ』

「なるほど、バレンタインの記事に『動機』は書かれてたけど、『

『殺害方法』は書かれてなかった。彼女がコイツをどう殺すかまでは、操りきれないってわけだ」

『これはゲームだよ。ボクが作った、最高のゲームだよ。これからモマーダーズ・ログから生まれる殺人者はいくらかでも出てくる。世界よ、混乱しろ』

二月十三日という日付と、酒井俊哉の署名で締め括られていた。

「そんなこと……」

ツクシは言葉に表せないほどの怒りに震えている。

龍人はマードーズ・ログを開き、パスワードを入力し、ブログを書き始めた。

「ちょ……リユート、何してるの？」

手早く書き終えた龍人は、ツクシに顔を向ける。

「滝の上で男と争ってたら一緒に落ちてしまった。けど、俺はバリツを習得してたから助かった。でも、男を殺してしまった……って内容の文を書いただけだ」

解る人には解る、明らかにフィクションの文章。

「そんな探偵小説みたいなこと書いてどうするの？ ブログの信憑性を無くすとか？」

「いや、このブログも声明文も、軽く消去するつもりだから別に信憑性は、いい。ただ、犯人たちが声明を読んだかが気になったんでね」

「……なんで？」

「そしたら、この通り。ログイン画面にも、編集画面にも、編集後の画面にも、どこにも声明文へのリンクがないんだよ」

つまり、声明文のページに行くには、画像に隠されていたURLを直接入力する以外にない、ということだ。

「それで何が解るの？ どこにもリンクがないからって、入力すれば見えるんだから意味ないよ？」

実際、二人はその方法で声明文を読んでいる。殺人者たちも、同じ方法で読んだのではないか、と言いたいのだろう。

「犯人たちは声明を見てないよ。理由は二つ。一つめは、このサイトが誰でも見れる状態にあること。逮捕された犯人たちが、このサイトのことを警察に言っていないってことだな。これは後で調べるけど、同じ方法なんかで、口止めしてるかも知れないし、警察も犯行後のことはあまり聞いてないかも知れない」

このサイトが警察に知られたとしたら、たちどころに閉鎖されてしまうだろう。だが、閉鎖されていない。

「警察が知らないのと、犯人が声明を見てないのって、どう関係してるの？」

「あの声明を見たら、『マードーズ・ログに操られた』って、警察に言うだろう。そしたら、警察も少しは調べる。声明だって読むだろう。そうなれば、ここは重要視されて、閉鎖だ」

「声明のことも口止めしてるんじゃない？」

「俺がお前を殺人者にしてやった。ザマーミロ」って声明を読んだヤツに、『このサイトせいだ、と言うな』なんて言ってもムダだろ？ 暗示に、そこまでの強制力は無いよ」

暗示は、AとBで迷ったときに、どちらを選択するかを操る程度。あのような声明文を見せられては、暗示があっても、サイトのことを語るだろう。

「な……なるほど……じゃあもう一つは？」

「わずか六文字のパスワード程度なら、サブリミナルで伝えられるかもしれないけどさあ……」

龍人は視線を声明文に向けた。

「酒井さん。こんな長いURLを伝えられると思ってたら、あなたはサブリミナルを過信してる」

結局、マードーズ・ログについて調べたことは、校内新聞への掲載を取り止めた。危険である上に、龍人がマードーズ・ログと、酒井俊哉の声明文を削除するつもりだからだ。

「今日は疲れたなー。なんか甘い物食べたいなー。そーいえば、駅前に新しいクレープ屋さんが出来たね。誰かおごってくれないかなー」

部室には、他に龍人しかないというのに、ツクシは大声で独り言を言っているようだ。しかし龍人は特に気にする様子もなく、帰り支度と戸締まりの確認をしている。

「ツクシ、鍵をかけるから、早く出てくれ」

「……誰かおごってくれないかなー……」

ツクシは、それでも上目づかいに龍人を見つつ、独り言を呟いている。

龍人は問答無用と言わんばかりに、ツクシが部室にいるにも関わらずドアを閉め、鍵をかけた。当然内側から開けられるので、すぐにツクシが出てくる。

「ちよつと！ 無視したりドア閉めたり、ヒドイじゃない！」

「やけに大きな独り言だと思ってたけど、俺に言ってたの？」

「もう！ ブン屋は耳が命なのよ？」

「情報が必要か否かを選別するのもブン屋の命だね」

龍人は、改めて部室に鍵をかけ、足早に移動を始める。

「ちよ……ちよつと……」

龍人は歩みを止めない。

「うう……今日は諦めようかな……」

ツクシがそう呟いたとき、龍人が立ち止まった。

「ああ、そーいえば」

突然喋り始めた龍人に、ツクシは顔を向ける。

「最近駅前にクレープ屋が出来てやたら宣伝してたり、誰かがクレープクレープうるさくてな。それで思ったんだけど、ブログのネタがボツだから、クレープ屋の特集にでもしようか？ 校長のカツラはいつでも使えるし、よりタイムリーなネタだと思うんだが……」

ツクシは満面の笑顔で、何度もうなずく。

「そうか。でも、ツクシは疲れてるんだろ？ 取材は明日からに……」

…」

「大丈夫大丈夫！ 行こ行こ！ すぐ行こ！」

龍人はツクシに連れ去られるように、下校することになった。

（後書き）

「殺人者のブログ」をお読みいただき、ありがとうございます。
作者の類白井カルカロドンです。

内容は……気が付けば説明文になって……るような、なっていないような。一応、龍人よりも早く謎解きできるように作ってある……と思います。……と、曖昧表現はともかく、感想等いただけますと、今後の励みになります。良いなら良い、悪いなら悪いと、はっきり言っていただきたく思います。よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6617a/>

殺人者のブログ ~ Murder's log ~

2010年10月8日15時20分発行